

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ガイダンス：第2部

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上羽, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008306

ガイダンス ― 第2部

上羽 陽子

(国立民族学博物館)

第2部では、「教員研修ワークショップ」の9つの具体的な実践例を紹介している。

第1部の中山論考で指摘しているように10年間にわたる「博学連携教員研修ワークショップ」では、分科会として数多くのワークショップを実施してきた。

その特徴は、実践者が小・中・高等学校教諭、大学教員、博物館・美術館学芸員、国立民族学博物館（以下、民博）研究者と多彩であり、異業種間でタッグを組んで複数者でワークショップデザインをしていることである。

それぞれのワークショップは、民博の研究資源（研究者、展示、標本資料、映像・音響資料）と学校教育（教師、教材）を結びつけ、それらを活用して異文化理解・国際理解を深めてゆくプログラムとなっている。

ワークショップのカテゴリーが多様なことも「教員研修ワークショップ」の特徴であった。第2部では、開発教育系として織田、モノ系として上羽、呉屋、表現系として中山・居城・八代や小林・森茂・山本、ものづくり系として山田・木村、木村・山田・中牧、東峰、ICT系として今田がワークショップの事例報告をしている。

それぞれの報告では、改善点や意義について述べられている。報告者のなかには複数年にわたって「教員研修ワークショップ」を担当しているものもあり、経験を重ねることで明らかとなる改善点や意義にふれていることが、本書の特色でもある。「博学連携教員研修ワークショップ」の運営において、3回までは同じ担当者によるワークショップデザインをおこなうことを推奨してきた。回ごとにカンターパートとなる民博教員を交えることで、さらなる知見を深めて、より濃密なワークショップデザインを生み出すことができるからである。それは民族学・文化人類学への理解の深化でもあった。

さらに本書の資料的価値を上げていることは、それぞれのワークショップ報告に対して、協働作業をおこなった担当者からのコメントがついていることである。コメントでは、ワークショップの特色やワークショップに対する提言などが記されている。時には厳しい意見も付記されているが、ワークショップの意義を追求した結果であるともいえる。

一方、「教員研修ワークショップ」は、約2時間といった時間的制約のなかで実施されてきた。時間的制約をカバーするため、ワークショップ担当者は周到な準備をして、当日をむかえていた。その準備には目を見張るものがあった。しかし、異文化理解を促すには、2時間といった時間的制約が異文化への誤解を生み出す危険性もあることをコメント等では指摘されている。

異文化理解教育は初等中等教育で適切に行うことが重要であるが、民博研究者は学校教育現場において、どの学年でなにが教えられているかについてほとんど知らないのが現状である。今後、博学連携を持続可能にするには、多彩なカテゴリーのワークショップデザインの構築に民博研究者がより一層積極的に参加する必要がある。異業種間でのワークショップを通じた協働作業の重要性が、第2部の報告から浮かび上がった新たな課題である。